

Title	<ウアロマン>をめぐる覚え書き
Sub Title	Notizen über den „Ur-Roman“
Author	中田, 美喜(Nakada, Yoshiki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.251- 259
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈ウアロマーン〉をめぐる覚え書き

中 田 美 喜

はじめに、この標題がゲーテのハウアプフランツェ Urfpflanze に因むものであることはいうまでもないことであろう。ゲーテのハ植物の変態論 V の根底にあるこのハ原植物 V については、彼とシラーとの出遭いの重要な契機となつたと伝えられる、それをめぐつての両者の応酬、すなわち、それをハイデー V と呼ぶシラーに対して「いや、経験だ」とゲーテが答えたという例のエピソードがあるのであるが、小論のための暗示となつたのはその続きの部分である。なおもイデーだと言ひ張る相手を説得するために、ゲーテは何かの紙を取つて彼のハ原植物 V をスケッチして見せたというくだりである。ついでにいうとこの紙片は遺っていない。ただ想像復元図というものが伝わっていて、私もそのコピーを数秒間見たことがあるが、単純でどこなくグロテスクな印象であつた、胎児のそのような。

それはともかく、厳密に写生とはいえないにしても、このスケッチしたということ、もつともゲーテのこの場合他にしかたもなかつたであろうが、それが定義でも説明でもなくて図示であつたということが、ふたたび原植物という主題と結び付いて、あらためて強く私に思ひ出されたのは、多分私の場合もまた他にしかたがなかつたせいであらうとしかいいようがない。私は折から十九世紀ドイツの教養小説や歴史小説、現代小説、政治小説や社会小説や風俗小説、都会小説や郷土小説などの名を冠せられたおびただしい（しかも古い）小説に取り囲まれて、いったいドイツ小説——ロマ

ーン Roman (以後嚴密を期するためにこの語を用いる)——とは何なのかということ、少くとも一度はどうしても考えなければならぬ状態にあり、そしてそれに答えることができない状態にいた。定義も説明もできないでいた。そうしようとする気もなくなっていた。したがって私はもともとロマンとは何かということを考えていたのではなくて、ただこれらのあまりにも——と私には思われた——多数の、多種多様な形成物ないしは出来そこないがなぜ、どのようにしてことごとくすべてロマンであるのか、ロマンたり得ているのかと、いわば茫然と凝視していたに過ぎないというべきであろう。しかし多分そのおかげで、私はこれらすべてに共通するハロマン概念∇には到達することはできなかったが、ゆくりなくもそれら多様なすべてに内在しそれらをロマンたらしめると同時に、それらをロマンとして多様ならしめているハウアロマン∇なるものの姿を垣間見ることができた。そしていま私は自分で忘れないためにという以外の必要もあって、その私のハ経験∇を急いでスケッチしておくことにした。ただしその際一つの前提として、この標題はさしあたってたとえばハ原小説∇といった翻訳を通じての拡大された解釈や適用をかく拒むものであり、この覚え書きはあくまでもハロマンの変態論∇としてドイツ文学史研究の密室内の試論に留まるものであるというのである。

1

ハウアロマン∇について、その主要な特徴を図式的に示せば次のようなものである。

1. 主題は恋愛、なかならず英雄や貴人の男女間の恋愛である。
2. 進行は理想的理想主義的であり、幸福な(結婚による愛の成就という)結末をもつ。

3. 架空の、実際にはなかった、うその出来ごとの組み合わせである。
4. 語りは三人称体 *Erzählung* である。
5. 物語の展開(筋の構成)は *in medias res* である。
6. 用語文体は洗練された、高尚な、芸術(人工)言語である。
7. 「序文」をもつ。

説明は抜きにして、このモデルが十七世紀のいわゆるバロック・ロマーンのうちのある種のものにすこぶる似ているのはやむを得ないことである。以上の性質をすべて備えたロマーンが発生するつまりドイツ語で書かれ始めるのは一六五〇年前後であり、それからの世紀後半に盛んに流行したのち、世紀の終りとともにそれはほぼ完全に消滅するが、この時期ロマーンと名のつたのは、名のることを許されたのはこの種のものだけ、すなわち△英雄恋愛物語▽*Helden- und Liebesgeschichte* だけであり、その他のものすなわち先の△ウアロマーン▽の要件を欠くものはすべて△物語▽*Geschichte*△伝▽*Historie*△記▽*Beschreibung*△説▽*Relation* 等に留~~ま~~った。△*Historia von D. Johan Fausten*△(ファウスト博士物語)の例にも見られるとおり、△物語▽や△伝▽や△記▽として古くから文学領域での高からぬ席を与えられていたところへ、この△ウアロマーン▽はフランス帰りのかおりを撒き散らしながら新たに参入したものであって、フィリップ・フォン・ツェーゼンの「アドリアのローゼムント」(一六四五)の序文の宣言にも似た調子にも見られるようにみずからは颯爽を気負ってはいるもの、古いがわの眼から見ればまことに異形というべき、そればかりでなく今日の意味すなわち類概念化したロマーンの眼から見ても、これが小説かと思われるような奇異さといかがわしさをぎらつかせていた。この△ウアロマーン▽に対しての最も熱心で勤勉な攻撃はゴットハルト・ハイデガーの△*Mythoscopia*

Romanica) (一六九八)に見られるが、何もこの敬虔なカルヴァン派牧師にかぎらず「心ある」人々が、とくに青年婦女子の徳操への有害性のかどをもつて、この新参者に対して一斉に鼻をつまんで見せるのは、いわば当時の文学的風俗に属するような事柄であったし、そのためにかえってそれが攻撃を受けるがわからぬ謙遜のトボスとして逆用されることにもなるのであった。先取りになるけれども、およそ文学のジャンルのなかでロマンというそれほど、全体として悪口をいわれ続けてきたものはないと思うが、それはハウアロマンからの遺伝によるものと私は考える。

それはともかく先に挙げた七項目のうちの最後のものは、奇異を印象づけるためにそこに置いたが、「ロマンを書くからには序文も書かざるを得ないので」といった序文を読むことは研究者には稀ではないし、ロマンから序文が最終的に消滅したのが今からそう遠くない時期であることは多くの者にとって常識であるのみならず、古いロマンにおけるその意義の認識はますます深まりつつある。ところでなおいまの図式に少々書き加えを行ないたい。説明は省く。

8. 作品の題が人名(多くは女名)で、簡単である。
9. 作者は実名を名のっている。
- 10 女性の読者を期待している。

2

さてここで一つの試みとして以上のハウアロマンの諸特徴を多少の修飾を施しながらすべてひっくり返してみたい。

1. 主題は恋愛でなく、主人公は英雄でも貴人でもなく、市民ですらない。

2. 進行は諷刺的・幻想破壊的であり、結末は一時的である。

3. 現実の事件や経験が多く取り入れられている。

4. 語りは一人称体 Ich-Erzählung である。

5. 筋の展開のしかたは ab ovo である。

6. 用語は日常的な、民衆的な、自然な言語である。

7. 序文をもたない。

8. 作品の題は人名でなく、冗長である。

9. 作者は変名を用いている。

10. 傾向・内容が女性の読者に向かない。

もしもある作品でこれらの目印すべてを備えているものがあるとすれば、それはもうみごとにハアンティロマンといいつてよいと考えるのであるが、それらはみな何を隠そう、ハンス・クリストフェル・フォン・グリーンメルスハウゼンのハドイットの阿呆物語Ⅴ(二六六九)、すなわち同じ時期かの英雄恋愛小説と並んで大いに流行し、バロック・ロマンの重要な支柱をなしていたいわゆる悪漢小説(ロマン・ピカレスク)の代表的作品の形態的特徴と符合するものである。

少々話がうま過ぎるという懸念のために補足するならば、自他ともに許すきわめつきの保守主義者でありながらこのグリーンメルスハウゼンには別にハディートヴァルトとアメリンデⅤ(二六七〇)、ハプロクシスムスとリンピーダⅤ(二六七二)という二つのロマン Liebs u. Leidsbeschreibung od. Lieb-Geschicht-Erzählung があり、それらにおいて

彼はハウアロマンVの諸要件を忠実に守っていて、したがって当然のことながらそこでは自分の本名を名のっている。この使い分けられた二つの顔があまりに異なるために、ドイツの文学史研究はハア呆物語Vの作者を彼と結び付けることができるまでにまる二百年を要したほどであった。バロック期は外国文学の盛んな輸入と模倣の時代であり、輸入や模倣の方向づけの学問としての詩学ないし文芸理論もまた大いに栄えたので、ハウアロマンVの諸要件も、私が見えを列挙したやりかたが与える印象よりも当時は実際はるかに規範的に作用していたものと考えてよい。たとえばそれはハア呆物語Vと同年に出た老大な英雄恋愛小説、アントン・ウルリヒ・フォン・ブラウンシュヴァイク・リューネブルク公のハシリアのアラメーナVの序文からも十分に窺われる。が、であるとするとまたグリーンメルスハウゼンは、ウアロマンの規範に通暁しているのであるから、つまり完全な方法意識をもって彼のアンティロマンを書いた、とも考えられてくる。ハア呆物語VにわざわざハドイツのVと付け加えられている理由については従来研究者間に種々の意見のあるところであるが、それすらもハ反フランスVの意味として、アンティロマンの方向に沿って解釈されるべきなのであろうか。

3

ハウアロマンVとアンティロマンVの両方のモデルを対比してみると、各項のかけ合わせもしくは混ざり合いを通じて、中間にいくつかのモデルを想定することができよう。事実その好例はアンセルム・フォン・ツィーグラール・ウント・クリプハウゼンのハアジアのパニーゼV(一六八九)に求めることができる。ここでは三人称体の語りと *in medias res* の構成による英雄恋愛小説というかたちにおいてウアロマンが保たれているが、素材・格調・文体・用語やまた

特にスカンドルなる魅力的な従者の姿などにおいてアンティロマンの要素が大幅に取り込まれることにより、ウアロマンはもはや全体の枠か容器としてしか感じられなくなっているほどである。われわれが知っておかなければならないのは、以上のことを作者自身明瞭に意識した上で行なっているということである。この作品の表題に添えられた長々しい副題の最後あたりに「英雄恋愛小説の衣を着せて」とあることを見落すことはできない。また作者が序文中で、真に模範的なものとしてダニエル・カスパール・フォン・ローエンシュタインの「アルミーニウス」(二六八九・九〇)に比べれば自分のものはむしろ(「ロマンではなく」)「歴史物語」historische Beschreibungでしかない謙遜するのを単なるレトリックとして聞き流しにしてはならない。

英雄恋愛小説は十七世紀の終りとともに消滅するといったが、「アルミーニウス」は種としての「ウアロマン」を純粹培養してそれを巨大さの極致にもたらしただけであり、たしかにその意味においてノン・ブルス・ウルトラである。しかし「ハバニーゼ」においてはこの「ウアロマン」に対して——私の知るかぎりでは初めて——まったく新しいことが行なわれた、すなわち、ある物語素材が「ウアロマン」を自分を包む「衣」として利用した、ある物語意志が「ウアロマン」を一つの形式として把握し、その形式を通じて自己を実現しようとしたのである。「アルミーニウス」と「ハバニーゼ」とがほぼ同年に出たということはいかにも暗示的である。図式的に言えば「ウアロマン」は「アンティロマン」の体内にのみ込まれるかわり、それを「ロマン」に変容させる。自分などはとても謙遜しながらも「新たな」ロマンはもはやロマンであることをやめはしない。歴史は「ハバニーゼ」の方向に決し、やがて十八世紀にはあらゆる物語素材が「衣」をまとうまとならないにはほとんどかかわりなしに「ロマン」を名のるようになる、もともと限定付きで。いわく、「諷刺的ロマン」、「滑稽なロマン」、「政治ロマン」、「処生術のロマン」、

ハ大学のロマン \vee 等々、そして恋愛専門のものとしてハ粋なロマン \vee galanter Romanが。Geschichte & Historie
や Beschreibung の呼称は廢れる。

ここで一つの反省を行なっておきたい。それは、以上のようにして個別的なロマンもしくは下位のロマンが多数生ずることにより、ロマンなるものは外見上以前の種から類へと押し上げられた観はあるものの、木を見て森を見ずの状況は少しも解消されることなく、私はただ發生史を奇矯な方法でなぞっただけでふたたび出発点にもどってきたに過ぎないのではないかということである。しかし私は、それはそうでなく、実際にはロマンそのものの方に自分を明かすことのできない事情があるせいではないかと考えるのであり、それについては次の章で触れたい。もう一つはハウアロマン \vee がなぜそのままロマンにならず、消滅したかというごく自然にあり得る問いである。それに対しては非常に不完全かつ不十分であるけれども、目下はただ次のように答えるに留めたい、あたかもレッシングの劇を誹謗するのに、あれは演劇論の演劇化であって演劇ではないというのにきわめて近く、ハウアロマン \vee はロマンのモデル理論に過ぎなかったのだと。

4

問題は結局ハウアロマン \vee の図式に立ちもどってこれをあらためて見直しながら、これらの各項目が何を指示させられているのか、また実際にそうなのだが恣意的に並べられたように見えるそれらをどう繋ぎ合わせれば何かの形が見えてくるのかを説明することになるであろう。それらは、散文の物語のままに劇になろう、無限に劇に近づこうというハウアロマン \vee の意志、向上の意志につながっており、その意志の符號であると私は思う。その際の劇とはフランス

古典劇である。ポエジーの至高の形成物である劇の与えるのと同等の効果と感動を与え得るジャンルになり上がろうとする野心と、それからする劇の模倣への努力の表われや痕跡である。三統一の規則の、それもフランス的厳格さをもつて解釈されたこの規則のロマンへの適用であるといわれる *in medias res* の構成が、最も見えやすい手がかりであるかもしれない。しかしながら、所詮物語は劇の全体性には到達できず、本のなかには劇場は、たとえ世界じゅうの石を集めようと、世界小劇場は、建てられないのである。ハウアロマンは不可能なことを、劇という第二の現実に迫ることを欲し、その *Hybris* を罰せられたのであり、その罪がその子孫にまで及んでいるのではあるまいか。それに対してハアンティロマンの方は絵への志向がきわめて強いものであるといえよう。未知の世界の消息を与えたり、無知の眼を開いてやったり、迷蒙や偏見を正したり、幻想を打ち砕いたり、事実や現実や真実を描き出すのは *Didaktion* のはたらきであり、これと共にハウアロマンの *Repräsentation* への志向をかかえ込んだロマンは、そのようなものとしてのロマンであるかぎりついに自己の姿をとらえ得ないのではあるまいか。

*

最後にここで私にハウアロマンのモデル抽出のための根拠となったのが、フィリップ・フォン・ツェーゼンのハアフリカのソフォニスベ（一六四七）であることを告白する。これはハ序文によるとハフランス語の練習のためのV翻訳であったが、それはそれだけ私にとって——ツェーゼンのあくの強い個性があまりに多く入り込まぬという意味で——好都合であったのである。